

Problem Solving

Case 3



横浜・東戸塚を拠点とするフリースクール

おっち一塾

戸塚区

- | | |
|-----|-----------|
| 課題1 | 利用者の確保と対応 |
| 課題2 | 担い手の確保と対応 |
| 課題3 | 資金と場の確保 |

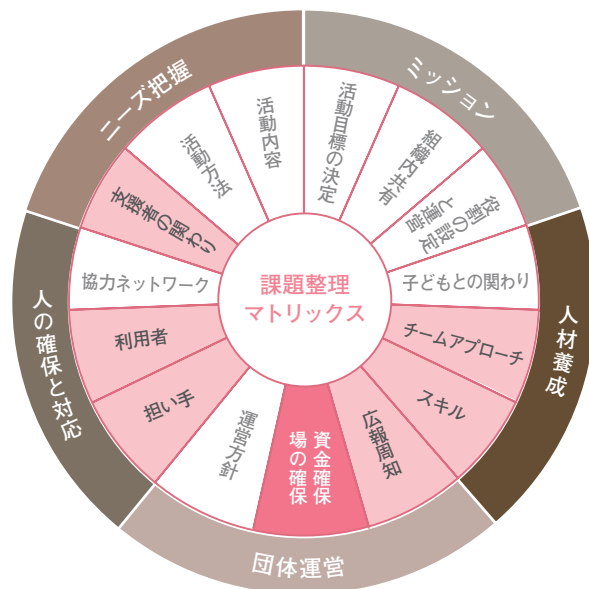
おっち一塾 地域の人々との関係性と心を育む“居場所”



火曜日スタッフ

JR 東戸塚駅隣接のビルの中にある「とつか区民活動センター」のミーティングルームが活動場所です。

「“学ぶこと”の喜びを分かち合い、実感してもらいたい」という願いをもって子どもたちに寄り添い、手助けする「おっち一塾」。オープンスペースでは、思い思いの対話があり、学ぶことへの関心と意欲が育まれています。



活動のきっかけ

2000年頃から、学校現場にも大きな変化が生じてきました。人件費削減、個人情報保護が求められるようになり、教員は事務業務が急激に増えました。また、自宅に持ち帰って作業することもあった成績処理等個人情報に関わる仕事を学校から持ち出すことが出来ないため、授業の空き時間や放課後にそれらの業務を行うこととなりました。次第に、教員と生徒とが共にいる時間が減ってくるという結果をもたらしました。

一方、学校だけでなく、家庭や社会も変化し続け、子どもの育つ環境に様々な課題が顕在化し、“生きづらさ”を抱える生徒たちの姿を見ることが増えてきました。子どもは“将来の宝”です。そんな“宝”を放置しておいていいのだろうか？そんな子どもたち・生徒たちのために「何かしなければならぬ。何が出来るのだろうか？」と考えました。子どもたちが困ったり、悩んだりしているなら、そっと寄り添い、手を差し伸べることは大人の努めではないでしょうか？

退職後、大学生になった教え子たちと共に、そんな思いをもって「おっち一塾」を立ち上げました。教員時代、さまざまな生徒と関わりました。今から30年ほど前から徐々に不登校の生徒が増え始めました。それまで、「生徒指導」といえば暴力や喫煙等問題行動をとる生徒への対応でした。このような問題行動は、他の生徒への影響もある為、教員もすぐに対応してきました。しかし、不登校の生徒は学校に来ていないわけですから、教員の対応も遅れがちでした。その結果、修得単位不足で進級・卒業が出来ず、多くが「退学」の道を選んでしまいます。退学の結果、さまざま

この方にお聞きました

PROFILE

落合 嘉弘さん (72歳)

元神奈川県立高校教員。2008年 不登校生支援のボランティア団体「おっち一塾」を立ち上げる。2019年塾長を退き、顧問となる。



但馬 香里さん (46歳)

落合先生が紹介された新聞記事を見て、「いつかこの方のお話を聞いてみたい!」と切り抜いて大切に保管したことがきっかけになり、2年前におっち一塾を見学した日にとっても共感したことから活動を始める。たくさん子どもたちに「あなたはあなたのままでいいんだよ」と伝えていきたいと思っている。元ウェディングカメラマン。現在、グリーンサポートが当たり前にある社会を作る一般社団法人リヴオンの事務局で勤務。



所在地 戸塚区川上町 91-1 モレラ東戸塚 3 階とつか区民活動センター
 URL https://occhijuku.weebly.com/
 開設年月日 2008 年 5 月
 スタッフ ボランティア 40 名
 活動内容 不登校児童・生徒への学習支援
 学習遅滞児童・生徒への学習支援
 コミュニケーションの不得意な子への支援
 火・木曜日 16:00-18:00 (開塾日が祝日の際はお休み)
 土曜日 13:00-15:00

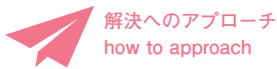
登録料 1,000 円
 会費 10,000 円 / 1 カ月 (会費の納入法は相談に応じます)
 外国と関わる子どもの日本語支援
 火・木曜日 16:00-18:00 (開塾日が祝日の際はお休み)
 土曜日 13:00-15:00
 登録料 1,000 円 会費なし
 不登校生・親の会を隔月で開催・イベントの開催

な体験、社会との関係性が希薄となり、自信を持って社会に出にくくなります。

学校に行けなくなる理由は千差万別。悩みも様々です。個々の生徒・子どもたちの問題解決のために、その子に寄り添う存在が必要だし、誰かが手を差し伸べていくことが必要です。「おっち一塾」の活動目的(ミッション)は、発足当時からずっと変わらず「“生きづらさ”を抱える子どもに寄り添う」です。常に、そこからスタートして、ボランティア・スタッフ皆で、その在り方を考え続け、子どもたちと共にいます。

課題1 | 利用者の確保と対応

I 不登校児やコミュニケーションの苦手な子どもの利用促進と継続



解決へのアプローチ
how to approach

不登校児が行きたい・行きつづけたいと思う「居場所」に

立ち上げ当初は、子どもたちが居場所に訪れることはなく、閑古鳥。教え子たち、先生仲間で、手伝うよと言ってくれた人など、スタッフのたまり場化していました(笑)。それが、徐々にHP や口コミで広がって、入塾希望の問い合わせが沢山入るようになりました。子どもたちが行ってみようと思う居場所。行きつづけたいと思う居場所はどんな居場所かとボランティアと共に考え続けてきました。

具 体 策

①基本はボランティアと子どものマンツーマン対応で

学校に行っていない子どもたちは、「勉強が分からない」「人とのコミュニケーションが苦手」など様々な不安を抱えています。おっち一塾は基本的にはマンツーマン。一人一人の子どもに寄り添いながら「解る」ことを通して喜びと自信をつけさせたいと考えています。

②教科学習のみではなく、経験と仲間づくりを

おっち一塾では子どもの自主性を大切にしています。その日の活動は子どもたち自身が決めます。教科学習はもちろん、

おしゃべりしたい、遊びたいという希望に応じて対応します。また、夏祭りやクリスマス会などのイベント、料理体験や働く場の見学ツアー、宿泊体験など、1年間で行う様々な体験を通して、豊かな心や笑顔を作っています。

③子どもたちの小さな変化に気付き、共有する

普段の活動時間や行事への参加によって、何もしゃべらなかった子が少し話したり、笑顔を見せるようになったり、狭かった話題が少しずつ広がったり・・・「小さな変化」ができてきます。スタッフはその「小さい変化」に気づけるように努め、皆で共有するようにしています。その他、慣れてきた生徒に関しても、元気があった・なかったはもちろんのこと、マスクを外さなかった、目が合いにくかった、友だちとトラブルが起きたようだ等々、子どもたちの変化や様子を共有しています。

情報共有のために毎回の活動後にショートミーティング、月に一度のロングミーティングを実施しています。

④スタッフにだから打ち明けたことの対処

子どもがようやく口にした、心の不安や、葛藤、悩み等について、スタッフの間での共有はしますが、何かの危険につながるということ以外は、保護者にも伝えることはありません。スタッフは子どもの声を傾聴し、信頼関係を一番大切にしています。

⑤いつもいるという安心・迎えてくれると思える信頼

子どもたちにとって、スタッフがいつもいてくれて、迎えてくれる存在になることで大きな安心を与えられると感じています。そして、大人の価値観を押し付けられることなく、何を話してもいいんだと思える、ありのままの自分を受け入れてくれる、そんな存在になることで、子どもたちにとって安心で安全な居場所になるのだと思っています。

II 外国にルーツを持つ子どもの利用



解決へのアプローチ
how to approach

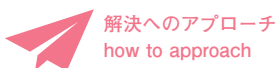
更に努力し続けている外国にルーツを持つ子どもの支援

日本語を母語としない子どもたちにとって一番辛いことは、
 ・友達とうまくコミュニケーションがとれない
 ・学校の授業がわからない
 ・社会生活がスムーズにいかない

子どもたちに「日本語」をいち早くマスターしてもらう手助けをしたい。そして、子どもたちの可能性を広げたいと思い、日本語支援の活動にも取り組んでいます。

外国にルーツを持つ子どもは年々増えていると思います。しかし、不登校の子どもたちほど、問い合わせがないのが現状です。まだまだ、対象となる子どもたちやその保護者に情報が届いていないのかもしれません。広報については、まだ途上にあります。

Ⅲ 保護者にとっての居場所



保護者にとっても「悩み」「辛さ」を吐き出せる場

自分の子どもが不登校になると、多くの母親は「ママ友」を失います。だからこそ、同じ悩みや不安を共有して「自分だけではない」という共感を保護者の間で持てることや、自分の気持ちを聴いてくれたり理解してくれる存在や場所は貴重で重要なことです。

入塾していない不登校の保護者でも「親の会」は広く参加可能にしています。

具 体 策

①入塾時、保護者面接の実施

入塾希望の際には、必ず保護者との面接を実施しています。多くは母親との面接になります。不登校になった経緯や家庭での様子を丁寧に聴いています。

不登校について勉強している母親も多く、子どもが学校に行けなくても、家庭で学校へ行くことを強要するなどの登校刺激を与えない方がよいこと等理解している人がほとんどです。しかし、父親が共感できなかったり、祖父母から孫の不登校を責められた末、母親が家族の中でも孤立している等のケースもあります。母親が抱える様々な苦悩を知る場にもなり、寄り添い、ともに子どもを育てていくことの大切さを改めて実感

する時間にもなっています。

②塾生以外の保護者の参加もOKに

おっち一塾の塾生以外の子どもの保護者の参加も可能にして、親同士の交流を進めています。孤立する保護者、子育てに悩みを持つ保護者が少なくなることを願っています。

課題2

担い手の確保と対応 チームアプローチとスキル養成

I おっち一塾のミッションに共感し 共に活動するボランティアの確保



活動12年「おっち一塾ボランティア」の今

発足から12年。おっち一塾のボランティアスタッフは、登録約40名、実働は20名程度です。おっち一塾のスタッフは全員がボランティアです。大学生・社会人・定年退職後の人が、それぞれ3分の1ずつという感じです。

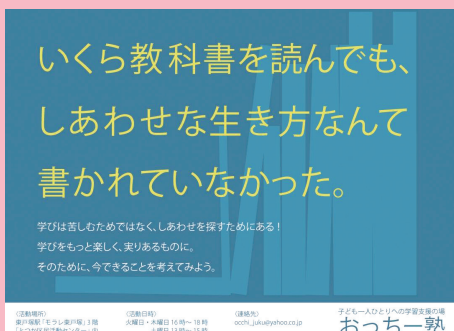
様々な年齢や立場の人が出会い、お互い影響や刺激を与えあう場になっており、スタッフにとってもおっち一塾は大切な「居場所」になっています。

具 体 策

①ボランティアスタッフ面接

おっち一塾が、単に学習支援を進めるところではなく、子どもの主体性「やりたい」を育てるところであることを伝えます。やりたいは「勉強・遊び・対話」なんでもよし。

そして、一番大切にしているのは子どもたちが安心して過ごせる居場所作りであること、おっち一塾が大切にしているミッ



おてらおやつクラブからのお菓子の寄付



社会科見学

ションや願いに共感してくれる人にボランティアスタッフになっていただいています。

また、面接時には、「子どもたちに大人の意見を強要しない」「子どもをありのままに受け入れる」「子どもの事情について根掘り葉掘り聞かない」等、おっち一塾の約束事を必ず伝え、理解していただいています。

②専門的な知識やスキルを活かしたい希望者に

おっち一塾は、外国にルーツを持つ子どもの支援も行うので、「日本語を教える技能」など専門的な知識やスキルを活かしたくて、ボランティアを希望される方が来ることも時々あります。もちろん、それは塾として有難いことですが、おっち一塾が大切にしているミッションや約束事を守ることももっと大切です。時に、自分を活かすのはここではないと思いついていく方もいますが、繰り返しおっち一塾のミッションや約束事を確認していくことで、団体内で大事にしているボランティアスタッフ像が共有できていると感じています。

Ⅱ ボランティアスタッフの育成・チームアプローチの推進



解決へのアプローチ
how to approach

おっち一塾ボランティアスタッフが集まり、共感的な活動ができてくることで、ボランティアスタッフが、自ら学び考える機会を求める声も挙がってきました。

具 体 策

①日本語教育研修

外国にルーツを持つ生徒（日本語が得意でない生徒）への学習支援方法について、ボランティアスタッフ自らが支援方法を考えてサポートしてきましたが、正しい教育法について学びたいという声も挙がり、専門家を招いて実施しました。言語学習の目標をどこに置いたら良いのか等、講師と対話しながら

主体的な学びの場とすることができました。

②ボランティアスタッフ宿泊研修

子ども達により良いサポートをしていくために、自分たちに何が必要なのか考え、共に過ごす宿泊研修。個性豊かなメンバーが学びの材料を持ち寄り、教え合い、吸収し合う形式で実施します。また、日本の学校教育の根底にあるものは？いじめの原因になる思想は？等、日常の活動時間では話し合えないこともとことん話し合います。

こうした時間は、スタッフ間の結束を強くし、子ども達のためのおっち一塾ですが、ボランティアスタッフ自身のためにもおっち一塾が大切な存在であることを確認できました。

Ⅲ 無償ボランティアスタッフの活動負担



解決へのアプローチ
how to approach

ボランティアスタッフには交通費のみ支給しています。普段の活動はもちろん、団体を運営していくための労力は、それぞれのスタッフが可能な時間と可能な力を持ち寄ることで、実現しています。安定的に団体の活動を行っていくためには、ボランティアスタッフの負担はかなりのものです。

Ⅳ 団体の運営・継続のためのリーダー的スタッフ



解決へのアプローチ
how to approach

創設者の落合は、現在顧問という立場になり、塾長は但馬香里が担っています。また、運営管理チーム、コミュニケーションチーム、会計チーム、渉外チーム、広報チーム等で構成する運営チームを作り、組織として団体運営していく体制づくりを進めています。

塾長の但馬は、おっち一塾のことが紹介された新聞記事を見て、関心を持ち、おっち一塾を訪れました。落合の教え子で始めたおっち一塾は、現在ではHPで見つかったり、大学のボランティ



木曜日スタッフ



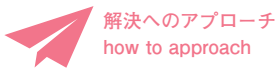
土曜日スタッフ

イベントで紹介された等、活動に参加するきっかけも広がってきています。

責任ある取り組みを継続していくためには、こうした主体的に活動に参加するボランティアスタッフの中から、リーダーを受け継いでいくことが必要だと思っています。

課題3 資金と場の確保

I ミッションに対する活動のための資金不足

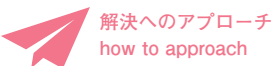


解決へのアプローチ
how to approach

最も解決しにくい団体の課題だと思っています。助成金の申請は毎年していますが、該当する助成金を探したり、申請手続きをしたりするのは、時間的にも非常に厳しいことです。更に申請しても受けることが出来ない場合もあり、そういった年は財源的に厳しくなります。

現在は生徒からの会費や神奈川子ども未来ファンドからの助成金などがありますが、外国にルーツを持つ子どもや経済的に支払いが難しい家庭からは会費免除や減免しているケースもあり、スタッフの交通費やイベント開催費等、団体を継続していく為に必要な活動資金の確保は常に大きな課題となっています。

II スタッフの負担を軽減するための資金不足



解決へのアプローチ
how to approach

私たちのような団体に、定期的な安定した補助金が提供していただけるような仕組みがあればと思います。若い学生や20代

のスタッフだけでも、アルバイト代程度の金額が提供できれば、もっと活動しやすくなるし、様々な居場所も増えるのではないかと考えます。

III 安定的な場を確保するための資金不足



解決へのアプローチ
how to approach

開設当初、マンションの一室を借りていたことがありますが、ひと月10万円の家賃はとても支払い続けることができず、今は区民活動センターのスペースを無料でお借りしています。

取材を終えて

ミッションが明確で、ボランティアスタッフにも浸透しているため、非常に安定的な活動が継続して行われています。その活動が、生きづらさを抱える子ども達や、その保護者を支え、自分を見出し、生きる意欲が持てるよう、柔軟な場と関係性が築けています。

志ある10代から70代まで、ごちゃ混ぜ感のある多世代の人があつまるところは、利用する子どもに限らず、ボランティアスタッフにとっても居心地の良い、大切な場となっているというおち一塾。子どもたちにとって、地域にとって価値ある社会資源だと思いました。課題解決の努力を様々されていることを紹介しましたが、資金の問題は、おち一塾のみの問題と捉えず、解決策を探る必要があるかと思います。



<https://occhijuku.weebly.com/>